特別篇:日本のフィルム・アーカイヴ❷

広島市映像文化ライブラリー

佐藤 武
Takeshi Sato

連載:
フィルム・アーカイヴ
の諸問題
第19回

本連載特別篇は、映画映像とその関係資料の収集・保存・情報化・公開等を事業としている日本各地の機関を紹介するものだが、第2回となる今回は、広島市映像文化ライブラリーを取り上げる。 (HO)

広島市の中心部、中央公園の一角に、市立中央図書館に隣接して広島市映像文化ライブラリーがある。周辺には広島城、ひろしま美術館、こども文化科学館などがあって文化ゾーンを形成し、世界遺産となった原爆ドーム、カープのホーム・グラウンドである市民球場、市内有数の商業ゾーン紙屋町も程近い。この地に映像文化ライブラリーが誕生してから、16年の歳月が過ぎた。その構想の萌芽はさらに数年前にさかのぼる。

1970年代後半、地方自治体において文化行政が重要課題となるなか、「国際平和文化都市」を都市像に掲げる広島市は、1979年5月に、市長の私的諮問機関として広島市文化懇話会を設けた。懇話会は文化行政のあり方や具体的な施策について討議を重ね、1980年10月に「広島の文化都市像を求めて」と題した提言を市長に手渡した。その提言の「文化的な広島づくりアイデア集」のなかに、現在の映像文化ライブラリーに結びつくものとして〝映画映像ライブラリー(市民シネマ)建設〟という項目がある。懇話会の座長を務めた広島大学の中川剛教授は、すでに「広島に映像資料館を」というエッセイを地元紙に書いていた。カリフォルニア大学バークレー校のパシフィック・フィルム・アーカイヴの活動に接した経験から、こうした映像資料館が広島にもあればと考え、原爆や広島に関するフィルムや古典的価値のある内外の劇映画や文化映画を収集して市民に公開するフィルム・ライブラリーの設置を提案する内容であった。

懇話会のメンバーの一人であり、自治省から出向し政令指定都市の実現に取り組んでいた澤田秀男助役がこの構想に理解を示した。映画上映団体の要望も大きな力になったという。市立中央図書館の二期工事の一環として考えられていた視聴覚ライブラリーの計画が、往年の名画を集めて見せる、市民に身近なフィルム・ライブラリーの構想へと発展した。手本とする施設として国内では東京国立近代美術館フィルムセンターがあり、パシフィック・フィルム・アーカイヴ、ニューヨーク近代美術館映画部(現映画ビデオ部)等のアメリカの施設の調査も行われ、映像文化ライブラリーの建設が決まった。幸い、貴重な文化遺産としてのフィルムの保存、映像文化の振興ということで、東映の岡田茂社長(現会長、広島県出身)が会長を務めていた日本映画製作者連盟や、メジャー各社、独立プロダクションなど映画界の理解と協力が得られ、35mmフィルムでの日本映画の収集が可能となり、収集作品の選定など、開館へ向けての準備が進められた。

1981年3月に建設工事が始まり、翌82年3月に竣工、同年5月1日に映像文化ライブラリーがオープンした。「原爆の子」の上映と新藤兼人監督の講演で幕を開け、中央図書館展示ホールでは、開館記念行事の一環として、懐かしの映画ポスターや日本映画史を飾る映画人の業績などを展示した「目でみる映画の歴史展」も行われ、にぎわいを見せた。

開館を報じる新聞記事には、「全国屈指の映像と音楽の殿堂」、「ビデオからオーディオまで、映像と音の総合ライブラリーとしては全国で初めて」と紹介され、日本映画の名作の収集をはじめ、フィルム、ビデオ、音楽資料を一括して扱う、当時としては先進的でユニークな施設として期待と注目を集めた。

広島市映像文化ライブラリー全景
(左側は広島市立中央図書館)

建物は地上3階地下1階、延床面積約1,300m²、映画上映用のホール(169席)、ビデオ視聴室(30ブース)、オーディオコーナー(5ブース)、試写試聴室(24席)などを備えている。施設の機能としては、フィルム・アーカイヴ的な側面、図書館の視聴覚部門的な側面、視聴覚ライブラリー的な側面を併せ持っている。2階のホールでは日本の劇映画をはじめ、文化映画、外国映画などの上映会を開催し、1階のビデオ視聴室やオーディオコーナーでは、ビデオやレコード、カセット・テープ、CDなどの音楽資料を視聴することができる。また、市民の教育文化活動を支援する視聴覚資料として16mmフィルムやビデオの貸し出しを行っている。他に、映像に関する講座や、音楽資料を利用してのレコード・コンサート、映画監督や評論家を講師に迎えての講演会も年に数回開催している。館長、主任、5名の職員、さらに上映やビデオ機器の操作、メンテナン

ス、受付等の業務を委託している業者のスタッフを含めて、13〜15名が日々の仕事に携わっている。

フィルムなどの所蔵資料は、1998年3月現在で、日本映画が491タイトル、ニュース映画が268本、16mmの教育文化映画が1,681本、貸し出し用ビデオが1,230本、館内視聴用のビデオが3,693本、音楽資料が約15,000点となっている。他に、国際アニメーションフェスティバル広島大会の受賞作品約100タイトルも保管している。収蔵庫は地下1階にあり、面積は145m²、温度・湿度は20℃、40%の設定になっている。可動式の棚に上記の資料を収めており、現在のところ全収容量の7割強を占めている。極力、効率的な収容をこころがけたとしても、満杯という事態はそう遠くない将来にやって来る。

現在、広島市では、新たな映像施設となる映像文化創造拠点の基本構想策定に向けて、調査・検討を行っている(候補地としては、広島大学の跡地が想定されているが、この跡地に関しては他の利用案もあり、今後の調整を待たなくてはならない)。映像文化ライブラリーの機能やフィルムをはじめとする資料は、この映像文化創造拠点へと発展的に移行していくことになるが、そこにできるであろうフィルム保存庫では、フィルムセンターの保存条件を参考に、より低温での保存を実現する必要があろうし、現在は、フィルム、ビデオ、レコードといった素材の異なる資料が同居しているが、その資料により適した環境での保存、また出し入れが頻繁なものとそうでないものとの区分けなども考慮すべきであろう。

日本映画の収集は、日本映画の名作(現在のところ『キネマ旬報』誌のベスト・テンにランクされた作品が対象となっている)、田坂具隆、新藤兼人、杉村春子、月丘夢路など広島(県)出身の映画人の作品、「原爆の子」や「八月の狂詩曲」といった原爆を題材とした作品を対象に、年に20作品のペースで収集している。

上映日数は概ね週5日。水・木曜日に文化映画を、金〜日曜日に劇映画を主とした日本の名作映画を上映している。さらに、国際交流基金などからフィルムの提供を受けて、外国映画の上映を年に2〜3企画行っている。年間を通しての上映日数は、およそ250日である。ここ数年の鑑賞者数を見ると、全ての上映会を合わせて、92年度が41,289人、93年度が35,567人、94年度が43,379人、95年度が42,637人、96年度が38,744人と、35,000人台から43,000人台の間で推移している。

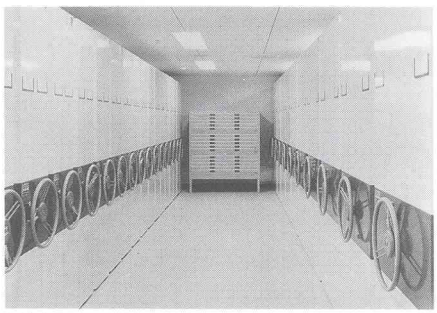
日本映画の上映は、監督、俳優、脚本家、ジャンルや年代などに焦点を合わせた特集を組んでいる。1992年以降、「新藤兼人の世界」(1992、29作品)、「山本薩夫監督特集」(1993、20作品)、「杉村春子特集」(1993、24作品)、「田坂具隆特集」(1994、15作品)、「小津安二郎特集」(1995、24作品)、「乙羽信子特集」(1996、33作品)と、現存する全作品を上映するといった〝全貌〟には至らないまでも、ある程度のフィルモグラフィーの輪郭を描くことができるプログラムが組めるようになったことが、これまでの収集の成果の一つといえよう。

外国映画の上映を振り返ると、国際交流基金映画祭「南アジアの名作をもとめて」(1983)をはじめ、ぴあが中心となった「大インド映画祭」(1988)、国際交流基金アセアン文化センター(現アジアセンター)による「タイ映画祭」(1990)、「フィリピン映画祭」(1992)、「インドネシア映画祭」(1994)、東南アジア祭'92実行委員会による「東南アジア映画祭」(1992)などの作品を紹介し、ドイツ文化センターの協力を得てファスビンダー、ヘルツォーク、ヴェンダースといったニュー・ジャーマン・シネマの作品や、「伯林—大都会交響楽」「裏町の怪老窟」などの1920年代のサイレント映画を上映、東光徳間が開催してきた中国映画祭の作品も1984年から1995年にかけてほぼ年1回のペースで上映してきた。最近の企画では、「まなざしの力/ケン・ローチ回顧展」(1995)、「G.アラヴィンダン映画祭」(1996)、「フランス映画の精華 ゴーモン映画特集」(1996)、「ロシア・ソビエト映画祭」(1997)などがあり、アジア、ヨーロッパなどの知られざる作品を、広島ないしは中国地方に紹介する窓口の一つとして機能してきた。[(　)内は広島での上映年]

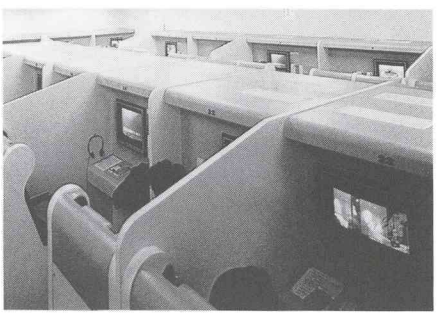
各地で映画祭の開催が盛んになり、1996年から国際交流基金などの主催で、映画上映ネットワーク会議が開催され、文化事業としての映画上映が全国的にも活発化する傾向にあると思われる。映像文化ライブラリーでも多くの企画を紹介したいと思うが、残念ながら、フィルムを借り受ける費用の上昇に予算がともなわず、年間に上映できる企画が少なくなりつつあるのが現状である。外国映画の魅力や芸術性を享受しつつ、その国の歴史・文化・現状などを学び、国際交流の一助とする意味でも外国映画の上映は重要であり、その充実は取り組まなければいけない課題の一つである。

1991年の暮れ、映像文化ライブラリーにとっても、日本のフィルム・アーカイヴにとっても特筆すべき出来事が広島で起きた。伊藤大輔監督の「忠次旅日記」の発見である。後に「忠次旅日記」と判明するフィルムが、映像文化ライブラリーに持ち込まれたことに端を発している。フィルムを所有していたのは広島市在住の大北一之氏で、旧宅を取り壊す際、倉庫に眠っていたフィルムの処分に困ったご家族が、映像文化ライブラリーに連絡してきたのである。たまたまフィルムが広島にあり、映像の専門施設があったことが発見に結びついた。こうした偶然が重ならなければ、「忠次旅日記」のフィルムは別な運命を辿っていたかもしれない。発見されたフィルムは、大北氏からフィルムセンターに寄贈され、調査・復元が行われた。発見から公開に至るまでの経緯は、フィルムセンターの佐伯知紀氏の文章(『キネマ旬報』1992年12月上旬号)に詳しい。映像文化ライブラリーでもプリントを収集し、1993年1月に上映会を開催、忠次は発見の地のスクリーンにも甦った。この時は無声のままでの上映だったため、弁士付きでの上映を望む声が多く、1995年10月、フィルムセンターの上映企画「シネマの冒険 闇と音楽」で活弁付きでの上映が実現したのを受けて、翌96年11月に広島でも澤登翠氏を弁士に迎えて上映を行った。「忠次旅日記」の発見から公開までの過程で、発見の窓口として協力するなかで、フィルム・アーカイヴの機能のなかでも、映像文化ライブラリーにとっては未知の分野だった、失われたフィルムの発掘・復元・公開という仕事の重要性と難しさを初めて知ったという思いがする。

映像文化ライブラリーに続いて、1980年代の後半から、川崎市市民ミュージアム、京都府京都文化博物館、福岡市総合図書館など、地方におけるフィルム・アーカイヴの機能を備えた施設が誕生し、活動を展開している。今後、これらの施設の発展・充実のためには、連携に向けての模索と同時に、設置の理念や地方の特色にふさわしい個性化が求められるだろう。広島にある映像施設としては、平和への貢献が重要な課題である。映像文化ライブラリーでは、すでに原爆をテーマとした劇映画やアニメーションを40作品近く収集し(平和教


収蔵庫

映写ホール


ビデオ視聴室

育向けの16mmフィルムは105本)、1995年の「被爆50周年特集」以降、毎年8月を中心に2〜3カ月にわたって特集を開催している。しかし一方で、「外国の原爆映画が見たい」という声もある。確かに、海外からのまなざしは平和を考える視野を広げてくれる。戦争や圧政、飢餓や貧困、地球環境の破壊など、平和な生活を脅かす要因が複雑にからみあっている現在、映像を通して平和を考えるには、核兵器や戦争の恐怖、地球環境や人権の問題など、幅広い意味で平和をテーマとした内外の作品を収集・公開するという方向への充実が求められるのではないだろうか。

広島市では、1985年から国際アニメーションフェスティバル広島大会が開催され、今年で7回目を迎える。映像文化ライブラリーは選考審査(1次審査)の会場となり、前述のように歴代の受賞作品の保存ということで協力してきた。フェスティバルとフィルム・アーカイヴとの連携・分業を考えると、文字通り2年に1度の〝祭〟であるアニメーションフェスティバルに対して、映像文化ライブラリーは、より日常的なレベルでアニメーションを浸透させていく役割を担うことができるのではないだろうか。そのために、アニメーションを積極的に収集し、アニメーションの表現の多様性を味わい、内外のアニメーション史を概観できるようなコレクションを形成していくことが考えられる。

広島におけるもう一つの国際的な映像の〝祭〟として、ヒロシマ国際アマチュア映像祭(1993年まではヒロシマ国際アマチュア映画祭)がある。「平和と生きる尊さ」をテーマに、国内および海外のアマチュアから作品を募集し、優秀作品を表彰するもので、被爆30周年を機に、1975年から隔年で開催されてきた(受賞作品は、中国放送が保存。残念ながら、昨年の第12回でいったん休止となり、再開が望まれる)。また、広島には松原博臣氏や川本昭人氏などのように、アマチュアの国際的なコンテストで受賞し、監督事典にも掲載されているベテランのアマチュア作家もいる。大学の映画研究会やそのOBといった若手のアマチュア(こちらはインディーズと呼ぶべきか)に目を転じると、全国からの公募作品をフィルムマラソン形式で上映し、観客の投票で受賞作を決定する「ひろしま映像展」などを中心に、活発な動きを見せている。こうした状況をフィルム・アーカイヴとして受け止める意味で、アマチュアの作品の収集も課題として浮かび上がってくる。広島で製作されたアマチュアの作品には、撮影時の広島の風景や生活(時にはマスコミが捉え得なかった突発的な事故さえも)が記録されている場合があり、広島の史的資料としての価値も生まれてくる。

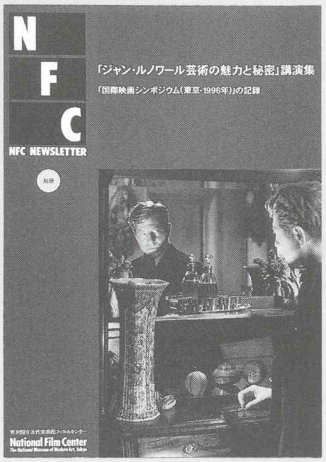
日本映画史上に残る名作の収集については、前述のように『キネマ旬報』誌のベスト・テンの受賞作品を対象としている。が、名作から娯楽作、資料的に価値の高い作品まで、芸術、文化、記録としての日本映画をトータルに、バランスよく回顧するには、受賞という尺度だけでは限界がある。受賞はあくまで公開時の評価であり、年月を経ての再評価という視点は反映していない。たとえ、サイレント期の、存在するだけでも貴重だという作品が発見されても、受賞の枠外にあれば収集はおぼつかない。時代を象徴するヒット作や、国民的スターの代表作は、無冠であっても、映画文化の貴重な資料である。日本映画の真価を、劇場のスクリーンを通して次の世代に手渡すためにも、収集にあたっては、幅広く柔軟な姿勢が必要ではないだろうか。

映像文化ライブラリーがこれまでに蓄積してきた500本に迫ろうとする日本映画は、貴重な文化遺産であり、今後も持続的な収集と適切な保存を講じていかなければならない。保存庫の問題のように新たな映像施設の構想を待たなければならない課題もある。道は平坦ではないが、さらなる充実に向けて着実な歩みを進めていかなければならない。

(広島市映像文化ライブラリー主事)

新刊、発売中!
「ジャン・ルノワール芸術の魅力と秘密」講演集

特集「ジャン・ルノワール、映画のすべて。」の関連企画として1996年12月7日に開催された「国際映画シンポジウム(東京・1996年)」は、内外で好評を得ましたが、そこでの5つの講演を翻訳・採録したく「ジャン・ルノワール芸術の魅力と秘密」講演集〉(NFCニューズレター別冊、A4版、45頁、定価950円)が出版されました。NFCの2階受付にて販売しておりますので、ジャン・ルノワール研究の新たな資料としてご利用いただければ幸いです。講師は以下の各氏(講演順)です。ジャン・ドゥーシェ(仏/映画評論家)、ギ・カヴァニャック(仏/監督の元助手)、アラン・ルノワール(米/監督の子息)、ジャネット・バーグストロム(米/UCLA映画テレビ学部準教授)、蓮實重彦(日/東京大学総長)



fiaf

東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ
http://www.momat.go.jp/
お問い合わせハローダイヤル
☎03-3272-8600

「NFCニューズレター」第19号
(1998年5-6月号/隔月刊)

発行・著作:
東京国立近代美術館 ©
〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3
☎03(3214)2561
編集:
東京国立近代美術館フィルムセンター
〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6
☎03(3561)0823
制作:
印象社
発行日:
1998年5月1日

*無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER
Bimonthly
(Volume IV No.3 May-June 1998)

Published and Copyrighted by
The National Museum of Modern Art, Tokyo©
Edited by
National Film Center
(The National Museum of Modern Art, Tokyo)
Add.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan
Tel.: 03(3561)0823
Designed and Produced by
Insho-sha
Date of Publication:
May 1, 1998

*No part of this publication may be reproduced or reprinted without the approval of the publisher.